

桜美林2005年秋期講座

「エッセーで綴る自分史」

〔米村邦臣作品集〕

# 本社勤務からロンドン滞在

米村  
邦臣

【目次】

- 一、憧れの経理部勤務
- 二、社長室勤務  
人生を変えたことばとの出会い
- 三、ロンドン到着第一日目
- 四、七十八日間ロンドン一周

## 一、憧れの経理部勤務

昭和四十七年七月に上京した。

東京本社は渋谷にあり、社宅は東急東横線の元住吉にあった。通勤時間四十分ほどの交通至便などところである。

イギリスのウエイツ社と提携して始めたP・O（プレキャスト）工法で建てたもので、五階建て二棟、六十世帯が入居、部屋は3Kの間取りで五十五㎡ほどの広さである。当社にとっては試験的な建物で少々不安はあったが、新しいものは文句も言えず、誕生四カ月の長女をまじえて、親子三人の東京暮らしが、そこから始まった。

勤務先は東京本社経理部である。海軍経理学校出身の部長の名前を冠して“古賀学校”といわれ、事務系の社員にとっては憧れの部署であった。

入社して六年、地方支店での厳しい“修行”を終え、勇躍本社へたどり着いた気分であったが、会社は大きく変わっていた。社名を変更し、登記上の大阪本社とは別に東京本社を渋谷に構えて、海外へと展開を始めていた。

九州の山猿にとつては相当のカルチュアショックであったが、会社の成長と自分も一体になれるその喜びが心の奥深くよりあふれ出し、やがてそのショックを克服して行つた。やっと順風が吹きはじめてきたその予感に胸躍らせて仕事に没頭していく。そしていつしか企業戦士になった。

最初の三ヶ月は会計課に配属された。都内の地理がわかるようにとの配慮からであった。毎日地下鉄や山手線に乗り、四十行ほどあった取引銀行の窓口廻りである。おおよその土地勘、つまりどの銀行がどこにあり、そこに行くには何に乗ってどう行ったらいいかが大体わかるようになったころ、財務課勤務になった。財務課では資金繰りや資金計画や設備投資計画を順次担当していった。いくつかの銀行を担当し、借入や預金協力などを銀行の担当者と、時には仲良く時には丁々発止、けんかしながらも毎日たのしく働いていく。

二十代終わりから三十代はじめにかけては中堅社員として無心になって働けるよい環境であったが、時代のうねりは当社にも及んできていた。

昭和四十七年に田中首相が登場、日本列島改造論で沸きあがり、土地投機に日本全国が浮かれ始めていた。そこにオイルショックが物価高騰に火をつけた。社宅ではトイレトペーパーがなくなるといって、近くのスーパーに妻が走った。企業は千載一遇のチャンスとばかりに金儲けに狂奔した。

そんな時代に当社は創業者社長から二代目社長へと引き継がれた。時の大蔵大臣やたくさんの政治家を招いて就任パーティーを都内有名ホテルで華々しく挙行したのは、昭和四十八年六月のことである。

この年の秋から、狂乱物価対策として大蔵省の不動産・建設業を含む六業種に対する窓口規制がはじまった。わが社もそのあおりを食った格好で、次第に資金繰りが逼迫していった。社内に特別対策室が設置され、私はその一員として全国作業所に工事代金集金の号令をかけた。また銀行に出かけては融資の願いをした。新規取引をお願いに地方銀行や農協まで回って歩いたこともある。このとき

に「資金繰りと身の丈に合った投資」の大切さを身にしみて学んだはずだったが、その教訓は生かされず、無常にもあだ花のごとくにその名を歴史に刻む運命となつていったのである。

もつと深い傷であればその教訓を生かしたのではなからうか。あまりにも簡単に危機を乗り越えられたことが、かえつて逆効果になつたような気がする。(今となつては繰言では有るが。)

資金繰りが好転し始めたころ、主計課へと転じた。そこでの最初の仕事は国税局の税務調査への対応である。

もともと当社は、海軍経理学校の教官をしていた先代の社長が始めた会社であり、優秀な海軍経理学校出身者が会社の中核を占め、健全な財務内容を誇っていた。私自身もそれに魅力を感じて入社したのである。それに加えて二代目社長は大蔵省に十三年勤務しており、地方の税務署長を歴任していた。国税局や税務署にとつては名実ともに模範的企業であつたのである。

しかし、国税局の調査を受ける第一線は戦戦恐恐で、毎日が針のむしろの心境

であった。なんとか大事に至らずに済んだが、このときの国税調査の経験が七年ほどのちに生きてくることになる。

昭和五十年四月、社内機構改革の目玉として社長室が初めて組織され、同じく海外事業部が海外事業本部へと昇格した。

二年九カ月あまりの経理部勤務を終え、新組織の社長室へと移ることになった。

流となり、いつしか大河の流れに合流する寸前まできていた。

## 二、社長室勤務

人生を変えたことばとの出会い

社長室総合企画部企画調整担当の辞令をもらったのは昭和五十年四月のことである。

二代目社長は就任三年目に入っていた。彼は社長就任と同時にブラジル進出を

決行し、創業者の命名した「ブルドーザー艦隊」の進路を国内から海外へと大きく切り替えた。

当時国内建設市場は実績主義がはびこっており、自由競争・実力主義がたてまへの海外市場こそわが社の進むべき道なりと確信し、海外での実績を国内に持ち込む、いわゆる「ブーメラン効果」を狙って決断したのである。

ブラジル勤務経験で培ったコネを生かし、得意な語学力を駆使して、率先垂範、精力的に海外を飛び廻った。

ついで行くほうも必死である。私も大きく方向転換する会社方針に振り落とされまいと、忘れていた英語をあわてて勉強しはじめた。なかにはスペイン語やポルトガル語を勉強する目ざとい者も現れた。

「スマートで目先が利いて几帳面、負けじ魂、これぞ海軍（船乗り）」  
と、さすが海軍出身の会社だなど実感させられたものである。

「ワンマン経営」が頂上に上りきるまでのよき時代であったというべきであろうか。秀吉が天下を取るまでの雰囲気になにか似ていたのではなからうかと思う



このごろである。

こういう時代に社長室は、既存分野と新規分野、特に国内と海外の利害関係を調整するべく、ある種の期待感をもって迎えられた。

国内海外相俟つてのバランスある成長が切望されていたのである。

総合企画部ですべての重要案件が検討され役員会に諮られる。そこで働く身には会社の方針決定に参画しているという充実感があった。やっとたどり着いた出世コース、坂の上の雲を目指して、一步一步登り始めていた。得意絶頂の時期である。

そんなある日、部長から突然

「きみは、人間計算機に過ぎない」と厳しく叱責された。

仕事のあと酒を飲んでいる時のことである。最初、その意味が理解できなかつた。

が、上司は酔いにまかせて

「きみは得意然として計算しているようだが、ただ単に計算するだけなら、コン

「コンピューターのほうがましだ。」

「つまりだな、数字には哲学がないといけない。ポリシーがないといけないんだよ。そして経営はロマンだよ。人の熱き思いだよ。」

「きみの計算した数字はたんなる数字の羅列で意味がない」

と、追い討ちのことばをはき続けた。

頭にガツンと強烈な一撃を食らった気がした。頭のなかが真っ白になった。

まさに青天の霹靂である。いままでこんな風に面と向かってしかられたことはなかった。みなが褒めそやし、自分も「数字には強いんだ」と自惚れていた。

そこに部長の叱責のことば。飲む酒の味がいっぺんに吹き飛んで、チキシヨーと思いつつも、頭を垂れて聞いていた。その声が遠くなったり近くなったり雷

鳴のごとく体中を響きわたったのは酒の所為ばかりではなかった。

もちろん、部長も酔った勢いでのことではなかった。配慮してのことである。

あとからジーンと胸に染みて二日酔いのごとく効いてきた。

この警醒の一言は私の胸深く刻み込まれて、その後の人生を変えていく啓示的

な「ことば」となった。

パスポートを取得したのはそれから二年ほどしてからのことである。

「数字はいきものである」

飛行機の中でそのことばを反芻していた。

アンカレッジを飛び立った飛行機はまもなくロンドンに到着した。

### 三、ロンドンへの旅立ち

「今まさに出発せんとす。」

昭和五十二年（一九七七年）七月六日、午後二十二時二十四分、羽田空港から日本航空機でロンドンに飛び立とうとしていた時に書いた日記帳の書き出しの文章だ。

入社してから十一年、会社は社名を「ブルドーザー工事」から「青木建設」に変え、海外への展開を始めていた。

当時、世界の目はアラブに引き付けられていた。オイルショックを契機として手にした潤沢な資金が「アラブダラー」と呼ばれてその使い道が世界の注目をあつめていた。世界中からアラブへアラブへと、蟻が砂糖に群がり寄るように、吸いつけられていく。その中継地点がロンドンであった。

アラブの王族たちがロンドン市内の高級ホテルを買い取って贅沢に暮らしていた。ロンドンにはアラブ系の人々で占拠されたような状況である。わが社も提携していたイギリスの建設会社と一緒に、サウジアラビアの建設工事を狙ってロンドンで情報収集を始めていた。

その任に当たっていた副社長兼海外事業本部長が直接サウジに乗り込み「現地エージェント」から確かな情報を得たとして、派遣部隊の選抜と赴任を本社に要請してきた。

事務担当として私に白羽の矢が当たった。

英語のAの字も喋れない。ましてやアラビア語なんてとんでもない。不安一杯の旅立ちである。出発前夜は、親子四人水いらずの楽しい食事の筈が、水サカズキを交わしての悲しい夕食となった。最後の晚餐になるのだろうか。

不安を抱えながら最後の夜を過ごし、旅立ちの朝を迎えた。

以下、最初の書き出しのあとに続けて日記帳に次のように綴っている。

「不安と期待が入り混じって複雑な心境だ。会社の人も多く来てくれたが、特に妻と娘や息子の見送りがあり、なんともいえない気持ちである。だんだん不安が増してくる。胸がジーンと締め付けられるようだ。海外に出て行くということがこんなにも悲壮感ただようものとは！

それは初めての海外渡航ではあったが、二年間行ったきりで帰って来られないという条件である。しかもその赴任地がサウジアラビアという、よく分からない砂漠の中の工事現場ということで、単なる海外出張ではないところに万感胸にせまるものがあるのだろう。この気持ち、この心境というのはやはり貴重なもの。海外渡航を重ねるにつれだんだん感激が薄くなつていくに違いない。この際じつ

くり味わおう。

由香（長女）が泣き出しそうにサヨナラを言う。一臣（長男）は無邪気にバイバイと手を振っている。妻は子供のうしろで感極まって涙をながしている。由香がとうとう走り出した。泣きながらずっとあとを追ってくる。いつまでもいつまでも・・・

胸にジーンときて目頭があつくなくなった。ついに涙が出てしまった。何も分からないと思っていた五歳の由香が、別れることの悲しさをちゃんと理解できるなんて思ってもいなかった。

この情景は一生涯忘れることができないものとなるう。まぶたに焼きついたあの声・あの顔・あのすがた・・・

羽田空港の国際線発ロビーのガラス越しでの別れのシーンである。

分かるなあー。

万に一つも生きて帰って来れない戦争中の出征兵の気持ち。もっともっと深刻であったであろう。それに比べればこんな事ぐらいなんでもないことだろう。

元気を出せ。

何とかなるさ。

しつかりしろ。

人間改造に努めるぞ。

英語だけ勉強すればよいのだ。

出発が四十分ほど遅れている。

やっと動き出す。

丁度雨が降り出し、窓に雨滴が一つ、一つ付き始めた。

やっと離陸した。」

機上の人となって深く目をとじアンカレッジまでの六時間あまり、涙に咽びながら物思いにふける。東京本社での五年間の思い出が懐かしく走馬灯のように、次から次へと頭をよぎっていった。

#### 四、ロンドン到着第一日目

羽田空港を飛び立ち六時間ほどでアンカレッジに到着した。最初の海外着陸地である。

先ほどまでは家族との別れに気が沈んでいたが、いつまでもめそめそするわけにもいかない。気持ちを切り替えて空港施設内を見て廻っていると、「アラスカうどん」の看板が目に見えびんできた。これが最後の日本食かもしれないとばかりに跳びついた。

カップヌードルみたいにカップに入っていてうまくはなかったが値段は驚きだ。二・九五ドル、為替は一ドル約二七〇円であるから、日本円換算八〇〇円ぐらいである。それでもあまり気にならず食べられたのは、はじめてドル紙幣を使う気持ちの高ぶりがあったからかもしれない。



再び機上の人となる。

マツキンレーの、神々しいまでに白く聳え立つすがたに圧倒され、眼下に拡がるユーコン河の自然の雄大さに見とれているうちに、目がしよぼしよぼしてくる。先ほど食ったうどんが応えたか腹が膨れる。ガスが充満してくる。トイレに通う。これは今になって思えば、「エコノミー症候群」だったのかもしれないが。

北極圏の白の世界から一転、田園地帯の緑の世界に変わった。まもなくロンドン到着だ。羽田を飛び立つてから一七時間経っていた。

七月七日朝七時三〇分、待望のロンドンに到着する。憧れの地に着いたという感動で胸が震えた。見るもの聞くものすべて異文化である。そしてそこには教科書で習ったものがそのまま存在していた。「世界の中心ロンドンにいるぞ」と叫びたい気持ちがあった。夢ではないか指をつねっても、酔いしれた身体には痛さは感じられなかった。

喜びに浸っている間は短かった。イミグレーションや税関が待っていたからだ。英語が通じるか不安がよぎる。なんとか無事に通過できた。迎えに来ていた

同僚の I 君の姿を見つけたときには、さすがにほつとした。男同士では抱き合うわけにもいかず、やあどうもどうもと平然と言葉すくなに、エリザベサンホテルに向かう。

A 副社長、H 部長、M 課長、N 課長が待っていた。簡単な打ち合わせのあと、提携先の「キユウビッツ社」に向かう。こじんまりした事務所らしくない事務所だった。そこで二人の英国人エンジニアに挨拶する。そのうちの一人、MR ライダーという人にはその後のロンドン滞在中にセスナ(軽飛行機)に乗せてもらい、市内から郊外へ拡がる歴史と緑の街をパノラマのように俯瞰するという貴重な経験をさせてもらうことになる。

昼食は会社のみんなでイタリア料理。

「メイアイハブコーヒー？」と教科書どおりに注文する。「ブラックオアホワイトト？」と聞きかえされてはもういけない。目を白黒させていたら H 部長が助け舟をだして説明してくれた。ブラックはストレートでホワイトはクリーム入りとわかる。力強く「ホワイト」と答えたら「ハウアバウツシュガー？」と追い討ちさ

れて、また戸惑ってしまった。

それ以降コーヒーを注文するときはついブラックですましてしまうことになってしまった。英語に対する臆病心から“にわかブラック党”に成りすましていたが、今ではすっかり本物の“ブラック党”である。真似ていればそのうちに本物に近づけるということか。

昼食を済ませるとM課長はあわただしくJAL便で日本に帰国した。A副社長はアルゼンチン航空で二十時二十五分ブラジル・リオデジャネイロへと飛び立った。ヒースロー空港まで見送る。

まだ太陽は空にある。夜の九時過ぎまで明るいのである。

A社長は私の目を見て「ウサギの目みたい我真つ赤だぞ」と言ったが、飛行機で寝てない上に、時差と早朝に空港についてからの一日の長さで参ってしまった。海外生活を送るうちいつしか呼ばれるようになったによつきり前歯のウサギの歯に、真つ赤な真つ赤なウサギの目。

ロンドン到着の第一日目は“ピーターラビット”の国でのながい“ウサギの日”

となった。

#### 四、七十八日間ロンドン一周

アシタマニアーナ

アラビア語で「明日にはなんとかなるさ」というような意味である。

今にも契約ができそうであると胸躍らせてロンドンに着いたものの、サウジの工事契約の話は一向に進まない。まさしく“アシタマニアーナ”であった。明日にはなんとかなるさと工事契約のカギを握っているエージェントのアラブ人は言うばかりで、その“明日”がなかなかやっつこないのである。なにせ契約概念はおろか約束事がまったく通用しない。金を借りても金利の概念がなく、元本の返済すら考えていない異次元の世界である。

あせったがいかんともしがたい。そんなアラブを相手に仕事をすることがどんなに大変なことかと気が遠くなる思いがした。

しかし、もしも契約が成立すれば予定されている“灼熱の地獄の地”での工事現場を想像すると、余計に生きた心地がしなかった。しかし心の片隅には、どこかで「明日がいつまでも来ない」ことをひそかに念じる気持ちがあったのかも知れない。当面はつとしながら、つかの間のロンドン生活を楽しんだ。

住まいは、ウインブルドンの近くのイギリス人の老夫婦、クラーク夫妻が営む朝食つき下宿屋に決めた。ロンドン郊外の緑の多い閑静な住宅地にあり住所は 41、Hampton Road、Teddington である。料金は週三十五ポンド。一ポンド四六〇円で日本円一万六千円ほどである。週契約で、とにかくサウジの明日に対処することにした。

住まいが決まれば、次は英会話である。

「日常会話もままならぬ、これは大変だ」とN課長がさっそく本社に掛け合い、会社費用でベルリッツの英会話教室に通うことになった。まるで泥縄式であるが

“必要は上達の母”とばかり、都心にある教室に地下鉄で通った。先生はアフリカ系の若い女性であった・「何でこんなことがわからぬの？」と言われているような厳しい教え方である。「うーぬ、負けてなるものぞ」と頑張ってみたものの、私には語学センスがないということを思い知らされた。それでも明日にはなんとかなるさとこちらもアラビア流でいくことにした。

そんなある日、シェークスピアの生家を見学に行こうと、近くの駅で切符を買う。

「ストラットフォード・アポン・エイボン、ワンアダルト」

窓口で人のよさそうなイギリス人に、つたない発音ではあるが、はっきりと言った。

突然切符が飛んできた。「なんだこんなにサービスがわるいのかこれじゃ日本の国鉄以下ではないか、これじゃ英国病といわれても仕方ないな」と思いながら投げ出された切符を手にしながらそっと駅員の顔を見た。怖い顔に変わっていた。

（国鉄が民営化されたのは、そのときから十年後の一九八七年のことになる。木

村治美著「黄昏のロンドンから」は一九七六年に出版されている。

態度急変を不思議に思い、そのあと人に切符を渡す様子をジッとみていると愛想がいいのである。この違いはなんだ。日本人に対する人種差別じゃないかと憤慨したもの、なにか心にひつかかるものがあつた。

シェークスピアの言葉を思い出す。

「To be, or, Not to be. That is Question!  
n！」

この場合は私流に

「やさしいかやさしくないかそれが問題である」とでも訳してみようか。

二ヶ月ぐらい後、またその窓口で切符を買った。今度は英語も少しは流暢になつていたはずである。

「リッチモンド、プリーズ」

なんと、今度はにこりとして切符を手渡すではないか。

「あつそうだったのか」

このとき一瞬にしてわだかまっていたものが消えさった。

これをきっかけにして、私の英会話に“プリーズ”が付くようになり、コミュニケーションがうまくいき始めた。体で覚えた生きた英会話である。自信が芽生えた。

一九七七年、イギリスはエリザベス女王即位二十五周年行事“シルバージュブリー”で賑わっていた。そんななか暇を見つけては観光に貴重な時間を費やした。

ロンドン市内はバッキンガム宮殿、国会議事堂、ビッグベン、ロンドン塔、公園はハイドパークにキューガーデン、美術館では大英博物館からターナー美術館と著名なところはことごとく見て廻った。

ロンドン郊外へと足をむけ、ウインザー城、グリニッチ天文台、ストーンヘンジサークル、カウターベリ大聖堂、ドーバー海峡。

最後にはテムズ川を越えてオランダのアムステルダムまで足を伸ばした。肝をひやしたのはそのときである。

スキポール空港の入国検査でしつこく尋問された。頭がカーツとなってしまっ



て、何を言われているのかわからない。冷や汗が出て、頬が青白く変わっていくのが自分でもわかった。私の後ろに長い列ができた。

とうとう別室に連れて行かれた。そして今度はゆっくりとはつきりわかる英語で聞かれた。

「アユジャパニーズレッドアーミー？」

なんと日本赤軍に間違われたのである。

「ノー、ノー」

ことばでは言い表せない。必死に身振り手振りのボディランゲージを交えて、なんとか“ジャパニーズビジネスマン”であることをわかってもらったとき二時間が経っていた。ボディランゲージも立派なコミュニケーション術であると実感したものである。

そのときの写真が今でも手元にあるがそれを見ると、私は長髪にジーンズ姿で、人相まで日本赤軍に似ているではないか、これでは間違われても仕方がないなど苦笑いしながら、その当時のことを思い出している。

ながい夏の日を、英会話の勉強に観光にとすごしているうち、いつしか九月になっていた。サウジの“明日”はまだこない。

ある日、東京本社から社長直々の電話が入った。なにごとか、と緊張する。

「サウジはあきらめろ、香港で大きな仕事が取れた。そっちに行ってくれ」

「はいわかりました」

答える声は喜びにふるえていた。ビジネス倫理が全く通じない異次元の人々を相手にするよりも、同じ東洋圏の香港での仕事は願ったりかなったり。なによりも日本に近いのがうれしい。小躍りして喜んだ。地獄で会った仏様。社長の声は「インシャーアッラー」と叫ぶ神様の声に重なった。

〈すべて神のおぼしめし〉

これはもうひとつ覚えたアラビア語である。

昭和五十二年（一九七七年）九月二十一日、七十八日間のロンドン生活を終えて一時東京へ帰る。香港に赴任したのはそれから一ヶ月ほど後の十月十七日のことである。

ロンドン最後の夜、メモ帳に次のように記している。

〈長いロンドン生活もいよいよ終わりを告げようとしている。優雅で貴重な経験である。わが人生に価値ある青春のページが彩られた。ともあれ、はじめての外国経験としてはまずは上々である。これをひとつの契機として真の国際人としての認識と実力を備えなければならない。何とか生活していくだけの英語は身につけたし、自分自身の適応力や性格というものも再認識させられた。「なかなかやるじゃないか」自信が湧いてきた。自信がつけば鬼に金棒である。〉